

## ネガティブケイパビリティの可能性を求めて

### 〜第二回作業所学会を顧みて〜

静岡福祉大学 増田 樹郎

「死の棘は先に逝きし者よりも後に残りし者にこそ深く突き刺さる」。誰の言葉なのか聖書の一節をもじった一文です。先に逝きし者の哀しみを覆い隠し、残りし者の無念さを閉じ込めて、〈いのち〉への問いかけがいま世界で続いています。対症療法しかないなかで、身を潜めつつも〈いのち〉の存在感を確かめていく日々を重ねています。

言うまでもなくケアの現場とは、本来〈いのち〉の豊かさが満ちあふれている場所です。どこか共通するそのまなざしは、やさしさ、美しさ、温もり、思いやりを感じさせます。病や障がいのある人との関わりの中かで、自己の感覚を頼りに他者の心情を解き、経験を省みて確かめます。言葉を整えてもうまく伝わらないことがあれば、声なき声を聴こうとして立ち止まります。当事者の寄り添なさに応えて居場所をつくっていかうとします。その繰り返しのなかに〈共生〉の意味を見いだそうとしているのです。

「ソーシャルファーム」は、病や障がいのある人々をアサイラムのなかに閉じ込めてきた過去と決別し、共に暮らし、共に働く（co-operative）地域をつくらうとする試みにほかなりません。施設（病院）完結型から地域中心型へと転換していくのです。しかし、ここで大切なことは、バリゼーション（valorization）つまり障がいのある人の「社会的な役割」を正しく「評価」する視点でした。「ノーマライゼーション」という理念に対する批判の一つは、この「役割」が「回復」であり、「評価」が「適応」でしかなかったことでした。たとえば、この社会は障がいのある人の〈働く〉をほんとうに必要なとしているのか、と問いかけたとき、生産性や利潤を優先する市場からすれば、その関心は「（適応）能力」とその「価値づけ」でし

かありません。そもそも〈働く〉とは、経済的価値に還元される一面を持ちつつも、他面では認め合い、必要とされ、役立ち合う〈共生〉の多様な営みの一つであるはずです。ソーシャルファームの試みには、その成否は今後委ねるとしても、そうした思想性が根底に流れています。

ところで、分科会の展開は、『わ』ならではの旺盛な問題意識に溢れていました。『意思決定支援』では、本来は双方向であるはずのコミュニケーションが支援関係において実現しないのはなぜかと問いかけています。ポイントは「リフレミング」つまり支援する者のルーティン化した障がい観（枠組）を劈（ひら）き、当事者の「世界」に身を置いてみる実践が求められていることです。

『就労支援』では、〈働く〉とは「多種多様な意味」を含んでいるというあたりまえの原事実に立って、「現場力」の可能性を問いかけています。支援する者の「自己覚知」つまりはレジエンス（復元力）の試みと云ってよいでしょう。現場に働く者もまた答のない実践を強いられるからです。

『グループホーム（GH）とは何か』では、施設の歴史を紐解きながら、GHが必要とされる現状でもなお、それが「機能別・分別化」に流されていないかと問いかけます。ケアの場であることと、馴染みの日常の場であることとの齟齬に揺らぎながらも、GHは利用する人にとって存在を証しする居心地のよい場所たり得るのではないかと語っています。

分科会に徹底している「主題」は、正解のない実践のなかで、揺らぎつつも問いかけ、忍耐強く取り組んでいく姿勢（能力）といってもよいでしょうか。これをネガティブケイパビリティといいます。専門的な知識や技術をとおして問題解決を図る能力をポジティブケイパビリティと呼ぶのに比して、前者は利用者等との関係づくりに関心しつつも内発的に成熟していく省察力ということができます。障がいであることの内奥に、多様な〈いのち〉の営みを見つめるまなざしこそ作業所学会が大切にしている議論ではないでしょうか。